

その他 ① メダカ（メダカ科）

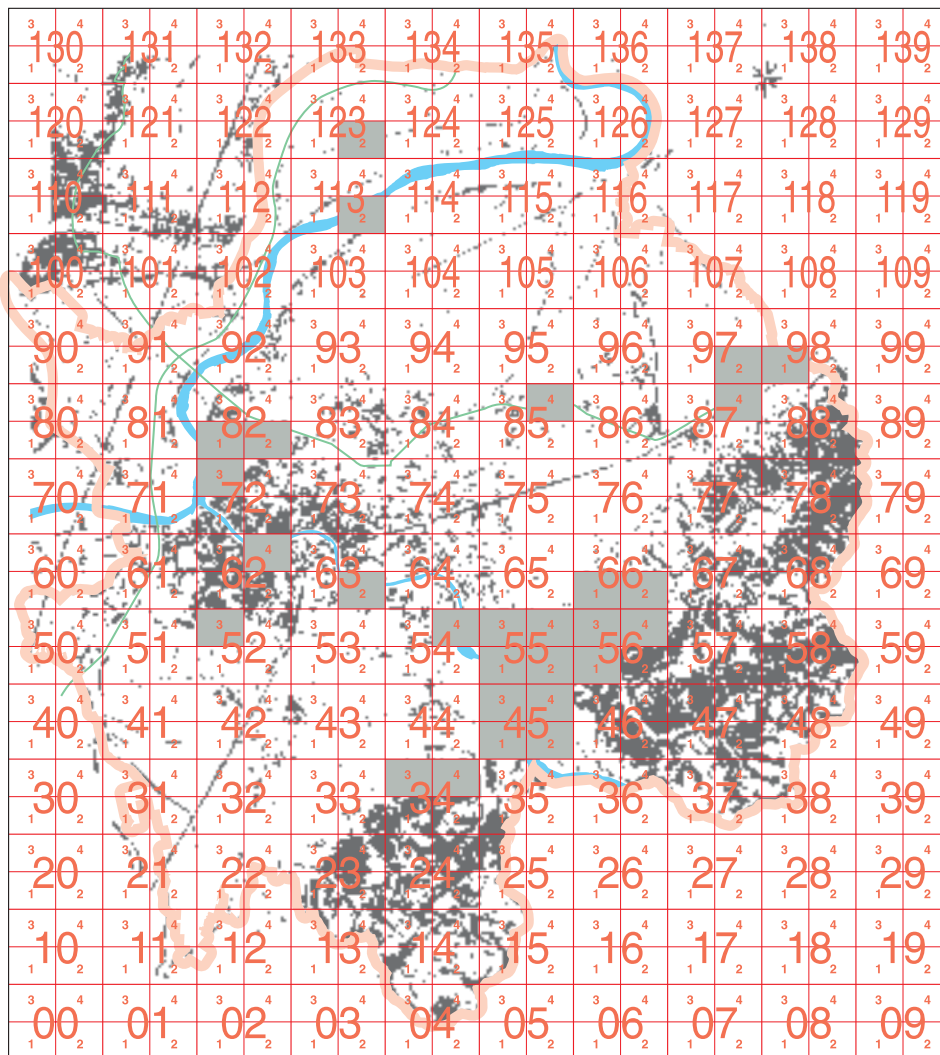


農村を水田や小川がとりまき、草地や林が点在していた頃、池や田んぼ、ゆるやかな流れの川には、メダカが群れて泳いでいました。

草や木も、トンボもクモも、サワガニやフナも、みんな自然のつながりを保ちながら生きていました。

メッシュ図からは、集中豪雨であふれた水によって拡散したと考えられる所もありますが、里山といわれた環境がいくらか残っている所や、自然な姿の水循環が保たれている所に、わずかに生息がみられます。

メダカの減少は、水田の乾田化、用排水路のコンクリート造り、農薬使用の増加等が続く限り、避けられないでしょう。メダカの生存出来ない環境は、人にとっても住みやすい場所だとは思われません。今後とも、見守っていく必要があります。



調査月	報告件数	メッシュ数
3	1	1
4	2	2
5	5	10
6	9	7
7	5	5
8	4	4
9	1	1
10	3	7
11		
12		
1		
2	1	1
合計	31	(32) 38

時期・色：4～11月 青みを帯びた褐色

大きさ：20～40mm

特徴：池沼や流れの弱い小川や水路に見られます。頭は少し平たく、目が大きく口は小さく上向きにつき、下唇が少し出ています。(県準絶滅危惧)

その他 ② ニホンアマガエル（アマガエル科）

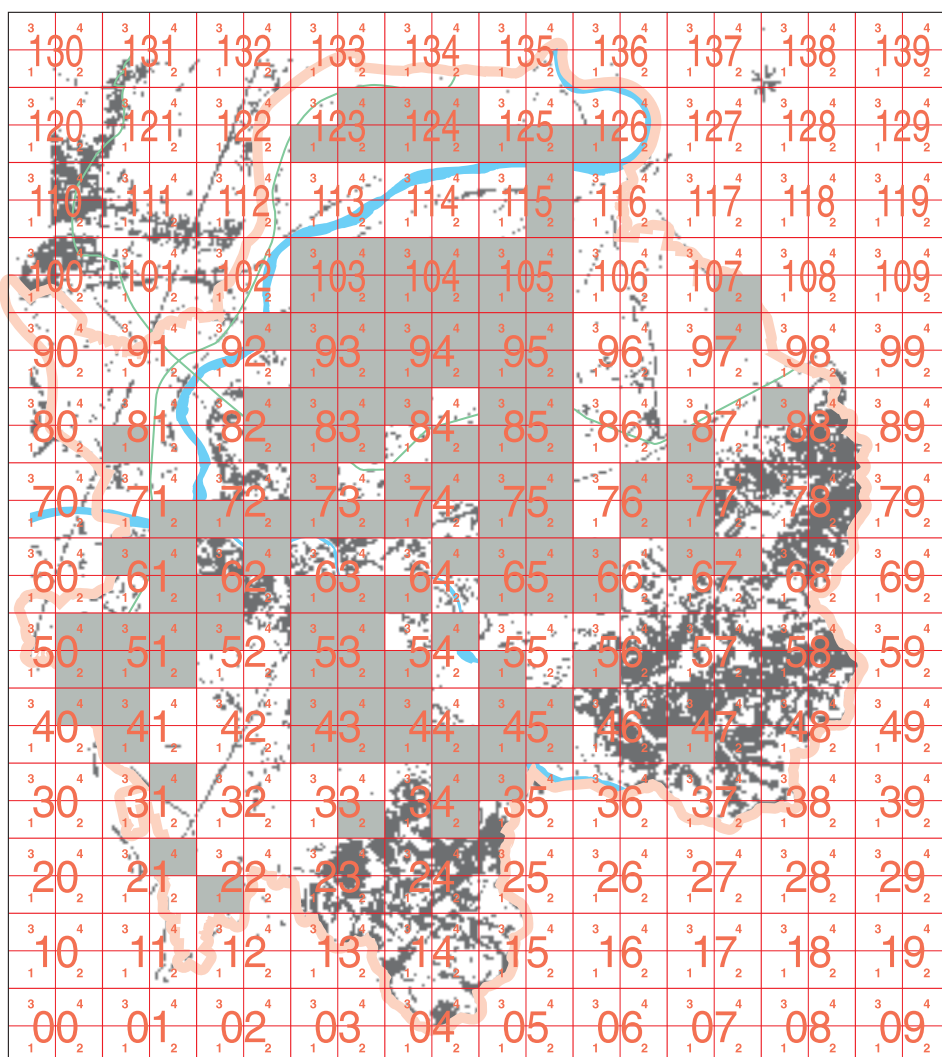


メッシュ図から判断すると、おそらく全市域に生息していると思われますが、空白の所はたまたま発見できなかったのでしょう。トノサマガエルと違って、陸地でも水中でも生きられるので、数が減らないのでしょう。

日本全国で見られ、緑色で、鼻先から腹にかけて黒い帯があります。とりまく状況で灰色や茶色に変化します。

草木の中や水田等に住み、オスは繁殖期でなくても低気圧が近づくと鳴きだすので、アマガエルと言われています。晴天の日中は、葉や枝などの上で動かないでいることが多く、雨になるとよく動きます。

オタマジャクシのときは、魚、ヤゴ、ザリガニなど、カエルになれば鳥、ヘビなど肉食動物を支える大切な存在です。



調査月	報告件数	メッシュ数
3	1	1
4	14	15
5	13	24
6	15	72
7	18	31
8	16	35
9	20	32
10	11	19
11	6	7
12		
1		
2		
合計	114	(127) 236

時期 ・ 色： 4～10月 普通は緑色

大 き さ： 20～45mm

特 徴： 平地や低山の田んぼ、住宅地のアジサイなど、どこでも見られます。少し薄い緑色で鼻先から耳の後ろまで、黒い帯状の模様があります。

その他 ③ トノサマガエル（アカガエル科）

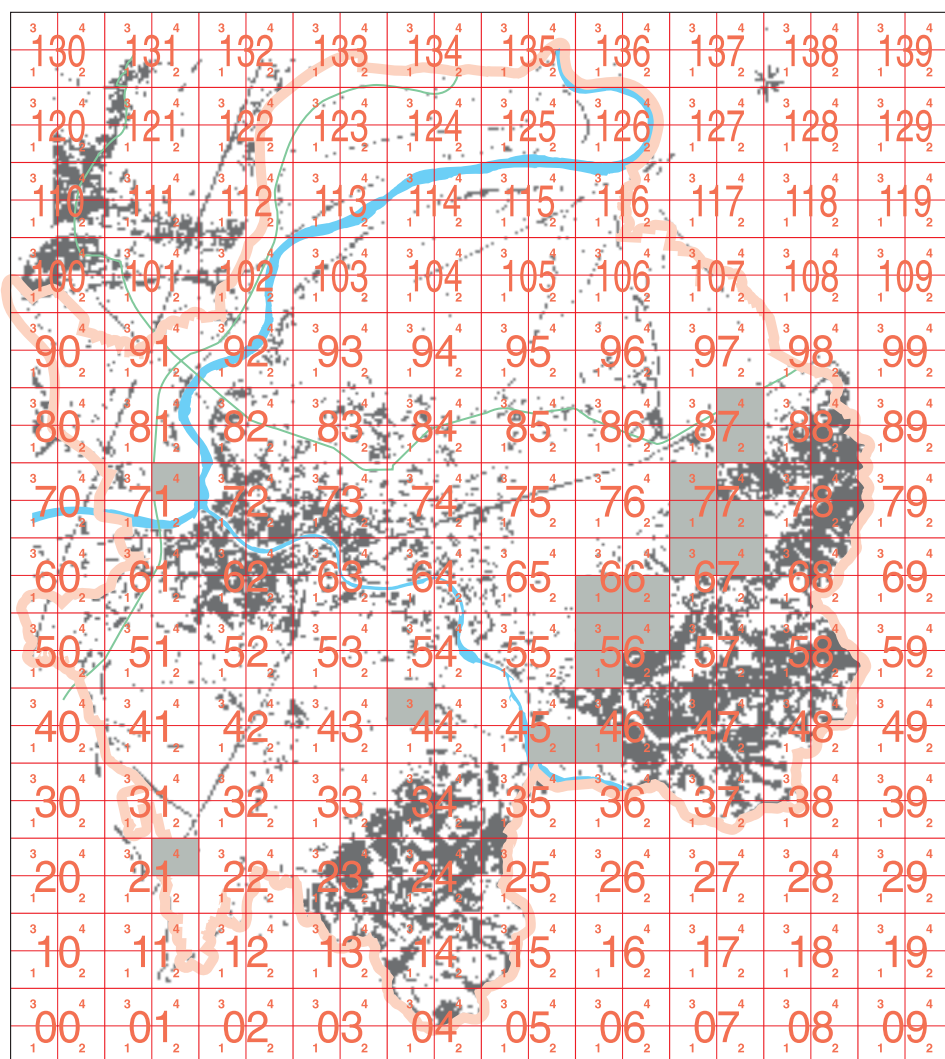


平地や里山の池や沼、田んぼなど、水と深くつながりを持って生活していました。

池や沼が埋め立てられ、水田の乾田化や用排水路の環境悪化などで、トノサマガエルの住める水辺は激減しています。

メッシュ図では、里山の自然が残されている水田地帯や平地の池などに、ようやく姿が見られる状況になっています。

オタマジャクシの時はもちろん、成体になっても水を必要とするため、稲作の乾田化による影響が大きく、常時水のある水田や湿地を守っていくことが大切になっています。



調査月	報告件数	メッシュ数
3		
4	1	2
5	3	3
6	7	8
7	3	3
8	5	6
9	1	1
10	2	2
11		
12		
1		
2		
合計	22	(17) 25

時期・色：5～10月 薄茶色や黄緑

大きさ：50～95mm

特徴：薄茶や黄緑の地に黒い斑点が散らばり、鼻先から背中中央に黄緑の太い帯状の模様があります。（県絶滅危惧Ⅱ類）

その他 ④ アカハライモリ（イモリ科）

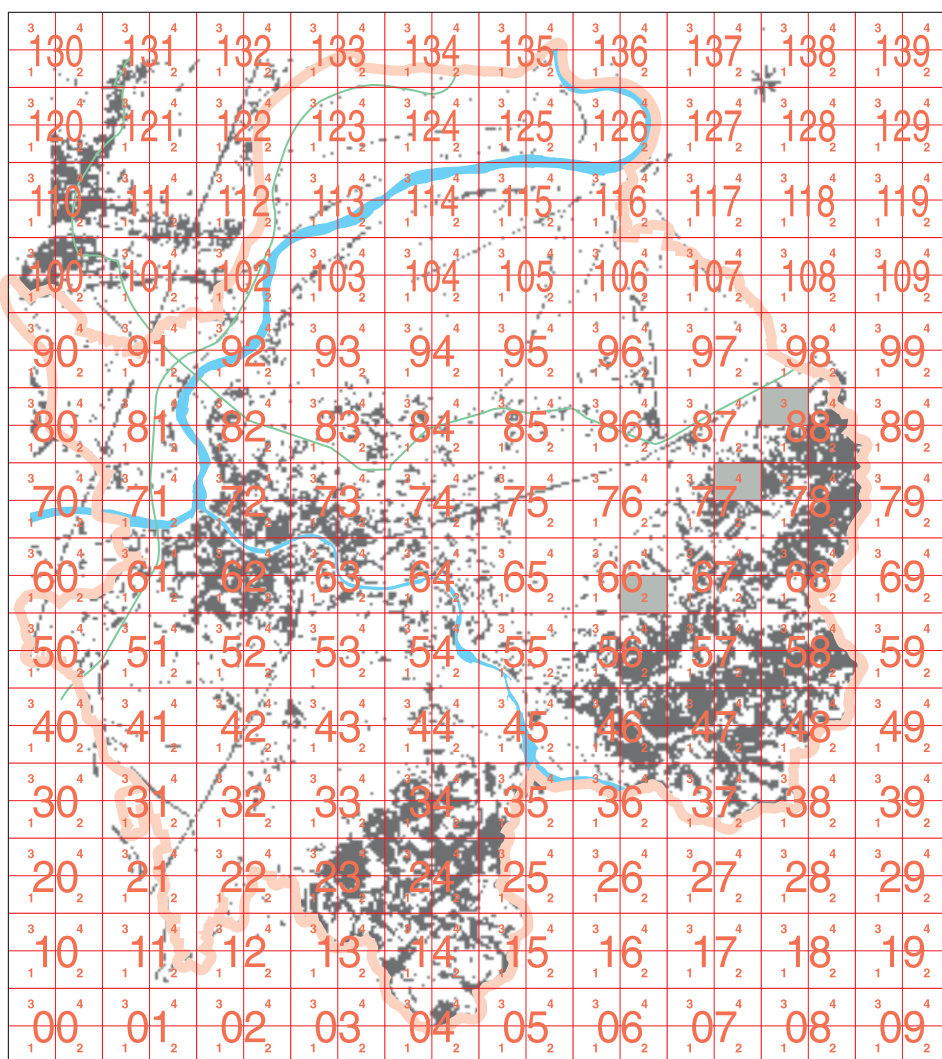


本州・四国・九州と広く住んでいるイモリですが、生活している地域によって、体の色に変化があったり、求愛行動に違いが見られます。

体には、サンショウウオのような光沢がなく、背中が黒くなっていて、腹部が赤いので目立ちます。特に繁殖期には、顔の赤が鮮やかになり、オスでは尾が青紫色になり、メスの前でさかんにふります。

見つかった場所が少ないのは、古くからあった池や湿地などの、住む場所がなくなっていることと関係があると思われます。

しかし水中生活なので、調査がやりにくく発見が難しかったこともあるでしょう。身の回りの環境に注意しながら、観察を続けたいものです。



調査月	報告件数	メッシュ数
3		
4	1	1
5		
6	1	1
7		
8		
9		
10	2	1
11		
12		
1		
2		
合計	4	(3) 3

時期・色：4～11月 黒、黒茶

大きさ：80～130mm

特徴：池沼や湿地の水たまりで見られるものの数は少なくなっています。背中が黒いがサンショウウオのような光沢はなく、腹は鮮やかな朱色です。（県準絶滅危惧）

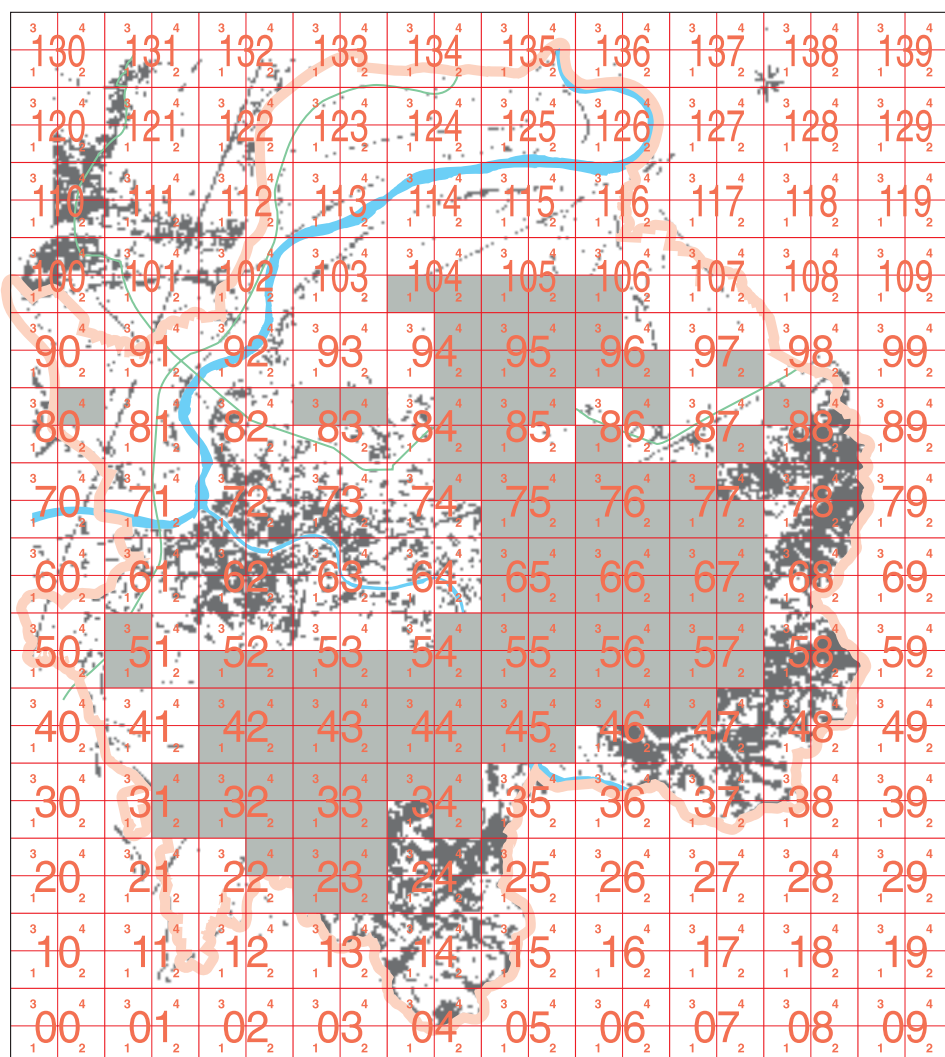
その他 ⑤ カワニナ（カワニナ科）



メッシュ図を見ると、丘陵地帯から水田地帯へと広い範囲に生息していることがわかります。北部の信濃川左岸地域からの報告はありませんが、いないのか調査もれか調べる必要があります。

大きな川のへりやよどみ、小川や池、いつも水がある田んぼの水路など多くの場所で見られました。沢の奥の方のきれい過ぎる水は好まず、生活雑排水の多い腐食性の強い水にも住めません。その中間の落ち葉などの有機物を含むゆるやかな流れで、泥や小石のある浅い川底を好みます。

ホタルの餌になっているので、カワニナが生きていける自然環境を保全し、ホタルを保護する活動が各地で行われています。



調査月	報告件数	メッシュ数
3	26	11
4	13	27
5	13	34
6	17	32
7	9	20
8	6	10
9	8	12
10	7	9
11	1	1
12	1	30
1	1	2
2	4	9
合計	106	(111) 197

時期・色：通年 黒、黒茶

大きさ：20～30mm

特徴：ホタルの幼虫の餌として関心がもたれています。太さ10mm位の巻き貝で、先端は欠けていることが多く、泥の中の有機物や落ち葉などを食べます。